

## インドネシアの幼稚園でのオンライン保育実践

理科教育・隅田学

### 授業の目的

本授業の目的は、幼児は身近な環境や事象にどのようにかかわっていくのか、そのかわりを通してどのように発達していくのか、という点を中心に、具体的な実践事例に基づきながら、領域「環境」のねらい、内容、留意事項等について考えることである。

本授業の到達目標は、以下の通りである。

- 1) 幼稚園教育要領における「環境」の狙い及び主な内容並びに全体構造を理解している。
- 2) 身近な環境に対する幼児の深い学びを実現する内容と指導上の留意点を理解している。
- 3) 環境に関わる子どもの学びを促進する情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。
- 4) 家庭や地域社会との協働による子どもの学び支援、小学校と教科等とのつながりを理解している。
- 5) 国内外の環境に関わる保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

### 本年度の実施と工夫

本年度は、コロナ禍において、基本的に全て遠隔（オンライン同期型）で行なった。

授業では、第14回：模擬保育の準備、第15回：模擬保育の発表を予定していたが、オンラインでの実施は難しいと思われた。

そこで、本年度より開始した、ヒューマンホールディングス・ヒューマンスターチャイルド・愛媛大学との「幼児教育」に関する産学連携プロジェクトの一環として、インドネシアの首都ジャカルタクニンガン地区にある保育所「Star Child Daycare & Learning Center」の子供たちに対して、オンラインでの保育実践を試みた。なお、ヒューマンホールディングス・ヒューマンスターチャイルド・愛媛大学との連携については、文部科学省の日本型教育の海外展開事業、「EDU-Port ニッポン」応援プロジェクトの一環でもあった。

### オンライン保育の実践

受講生 30 名を5つのグループに分け、ヒューマンホールディングス・ヒューマンスターチャイルドと共同で「vegetables（野菜）」をテーマとしたカリキュラムを開発し、現地の教員によるサポートも得ながら、オンラインで実践を行なった。そのオンライン保育の様子を以下に示す。



### 実践後の学生の反応

実践後、①授業準備について、②授業実践について、③インドネシアの子供たちの実態について、④オンライン保育実践の省察について、⑤今後の実践について、google フォームにてフィードバックを行なった。

その結果、回答した学生の80%以上が、準備や当日の実践について、「大変よく頑張った」あるいは「よく頑張った」と回答した。インドネシアの子供たちについては、「日本の子供達と変わらず、可愛い」「人懐っこい。積極的。リアクションが良い」「先生の言うことやこちらの指示をよく聞いてくれる」「伸び伸びと学習している」「とても元気で意欲的」などの意見があった。

工夫点については、「実際の野菜を用意して興味を惹きつけられるようにした」「アニメーションとフラッシュカードでアニメと野菜を結びつけられるようにし、覚えやすいように工夫した」等が挙げられ、反省点については、「定型文を用意するのではなく自然な英語のやりとりができるように工夫しようとしたが、緊張してあまりうまくできなかった」「子どもとの相互の関わりがなく、一方的になってしまった」等が挙げられた。

回答した学生の90%以上が、今回のような海外の幼稚園での保育実践の機会があれば参加してみたいと回答した。